

図工・美術科学習指導研究委員会

一 研究テーマ

子どもたちが生き生きと表現活動をするための学習指導のあり方
～材との対話に視点を当てて～

二 テーマ設定の理由

昨年度は、子どもたちが生き生きと表現活動をするための、新たな題材開発に視点をあてて研究を進めてきた。その上に立って、今年度は、子どもたちの学習活動が、より一層主体的で対話的なものになるために、特に材（素材・教材）と子どもたちの関わりに視点を当てて研究を深めたいと考え、本テーマとして設定した。

三 研究の経過

第1回委員会	5月31日	(火)	年間活動計画の立案	研究テーマの決定	(ZOOM)
第2回委員会	6月28日	(火)	教育課程に向けて教材研究		(中塩田小学校)
第3回委員会	7月8日	(金)	教育課程に向けて事前授業の参観		(中塩田小学校)
第4回委員会	8月25日	(木)	教育課程の午後の活動について打ち合わせ		(サントミュージゼ)
第5回委員会	8月29日	(月)	教育課程に向けて事前授業の参観		(中塩田小学校)
第6回委員会	11月7日	(金)	対話型鑑賞授業の参観		(和小学校)
第7回委員会	2月3日	(金)	展覧会鑑賞と対話型鑑賞授業の模擬授業		(サントミュージゼ)

四 研究の内容

(1) 教育課程研究協議会図工・美術教育会場校（中塩田小）の研究実践とともに

6月、中塩田小の重点研究会に、学習指導委員会のメンバーで参加し、授業で使用する予定の紙粘土や空き容器を使って、子どもたちの立場になって、実際につくってみる教材研究の取組みを共に行った。子どもたちの立場になって実際に製作してみると分かっていくことがいくつもあり、自分が製作を進める中で感じたことを中塩田小の研究の方向に沿って検討しあうことができた。また、メンバーがつくった作品は、子どもたちに提示する参考作品として、授業の中で、子どもたちが作りたいもののイメージを明確にしていく場面で活用された。

事前授業として行われた「空きようきのへんしん」と、教育課程本番授業の「元気の出るオブジェ」の授業実践からは、以下のような点が成果と課題としてあげられた。

- ・題材の導入段階で、共同研究で試作した参考作品を、発想のタイプ別に視点を与えて提示したことは、児童が歓声を上げて集中して見る姿が見られたことから、発想の幅を広げるという意味でも、有効であったと考えられる。
- ・「空きようきのへんしん」で、多くの子どもたちはあらかじめ「ジャムの空き瓶」のような空き容器を持参していたために、小物入れの条件に限定されてしまい、「どこにおいて」「何を入れる」「何の形の」と発想させた手順とは矛盾が生じてしまった。今回の展開であれば、様々な形状の空き容器をじっくり手に取り、その形や材質などから形や色へと発想を広げていくことの方が自然であった。
- ・題材全体を通して、子どもたちは自由に発想し、アイデアスケッチから一貫して製作した子から、アイデアスケッチとはまた違った形へと昇華していった子、アイデアそのものを変換して製作した子まで、様々な姿が見られた。平面としてのアイデアスケッチと、立体としての本製作には大きな壁があっ

たとの意見が出されたが、立体として製作するためのイメージをつかませる際、どんな手段・手だてを講ずればよいか、大きな課題であり、同時に造形的な力を培うための大切な過程でもあると考える。したがって、個の持っている素地力に応じて、アイデアスケッチでは絵や言葉での説明を全て認めつつ、形や色による表現力を養う場として大切に扱いたい。

- ・教材研究段階では、実際に子どもたちに粘土を手渡して発想を広げていくことも考えたが、具体的に授業展開の中に位置づけるとなると、タブレットの併用などの面から難しかった。
- ・イメージマップはイメージをふくらませることは有効。しかしそれをスケッチに表すところが難しい。オブジェということで、完成（決まった形？具体物？）にこだわらないのであれば、紙粘土に元気の出る色を混ぜ込んでスタートしてもよかったのではないか。
- ・発想段階では、鉛筆で黒しかない状態ではなく、折り紙をおいて切ってみたり、色を並べてみたりするのも良いのでは。粘土で丸めたり・四角くしたりして元気が出そうな形を探しても良かったのでは。
- ・言葉からではなく素材から発想するでも良かったのでは。素材から発想するという点については、今後も研究を続けていきたい。

(2) 教育課程研究協議会での実技講習に向けた教材研究

上田市立美術館（サントミュージゼ）の子どもアトリエの指導員に教えていただきながら、リモートでもできる実技講習として、「なんちゃって水彩画」（詳細は以下）を教えていただいた。

<材料・道具>画用紙（はがきサイズ） ビニール袋（画用紙と同じサイズにしておく）

水性ペン クレヨン えんぴつ マスキングテープ 霧吹き 雑巾

<やり方>①ビニール袋を画用紙と同じサイズに切る。

②切ったビニールに水性ペンで好きな色を塗り、画用紙に霧吹きで水をかけ、色を塗ったビニールをかぶせて、色をうつす。※何度か重ねて、好きな色をうつしていく。

出来上がったら、②を乾かしておく。

③コピー用紙に好きな絵を鉛筆で書く。

④③の裏面にクレヨンで色を塗っていく。

⑤乾かした②の画用紙に、③のコピー用紙を重ね、マスキングでとめる。

⑥鉛筆の線をしっかりとぞっていく。

※テープをゆっくりはがし、描いた線がうつっているはず。

⑦色紙などを使って額を作ったら完成

扱う素材は、日頃から身近なものばかりだが、はじきやすいビニールに塗ることや、霧吹きで湿らせた画用紙に転写するなどのちょっとした工夫をすることで、思いがけないにじみが生まれる面白さが感じ取れた。ありふれた素材でも、いつもとは違った使い方をすることや、使い方の一工夫をすることで、新鮮な出会い方ができることが、実感的に理解できる貴重な機会になった。

(3) 対話型鑑賞の授業参観と美術館との連携をはかった模擬授業の実施

東御市立和小学校で、市の美術館2館（丸山晚霞記念館・梅野記念絵画館）と連携した対話型鑑賞の授業が行われることに併せて、学習指導委員会のメンバーと、鑑賞の授業に関心のある教員が授業参観を行った。

対話型鑑賞とは、「様々なバックグラウンドを持って作品を見る子どもたち(鑑賞者)」が、作品の色や形などを根拠に互いに感じたことを出し合う中で、自他の気づきや考えの相違に触れながら、互い

に「納得」を生み出していく鑑賞方法で、教師は指導者ではなく、ファシリテーター（学びを促進させる役割）の立場としてその場に存在する。

実際の授業では、教師の「きく（理解する。受け止める。聞き分ける）関わり」「つなぐ（作品の表現・造形要素と。他の子の発言と。体験と。等々）関わり」「もどす（一人の発言を他の子に。みんなが共通基盤に立てる所へ）関わり」によって、子どもたちは、自分たちなりの解釈を深め、互いの納得を生み出していく様子が見られた。

2月には、上田市立美術館（サントミュージゼ）で開催されている展覧会で、学習指導委員会のメンバーと共に、各学校の図工美術科主任にも案内を出し、互いにファシリテーターになって、模擬授業実習を行う予定。

五 研究のまとめと課題

本年度は子どもたちの学習活動が、より一層主体的で対話的なものになるために、材と子どもたちの関わりに視点を当ててという点で研究を進めてきた。教育課程協議会での授業実践に向けて、教材研究や、事前授業を参加させて頂く中で伝えたい思いの共有化による対話や、気持ちを形へと繋げるために、実際に粘土を使って手を動かすイメージスケッチの実践の有効性などを多く学ばせて頂いた。また、研究協議Ⅱでは、上田市立美術館の学芸員の指導のもと、水彩ペンを使った作品作りの実践を紹介して頂き、日々の授業に活用できる内容を学ばせて頂いた。課題については以下のことが挙げられた。次年度に向けて引き継いでいきたい。

課題

- 上田市立美術館（サントミュージゼ）で紹介して頂いたような題材を知ること、前向きに図工美術の授業に取り組みたり、題材の引き出しが増えたりすることはありがたい。図工美術委員会から先生方に発信できるような取り組みを考えたい。
- C4th などを使って、データベース上で積み重ねた実践・研究・題材などを気軽に見られるシステムが欲しい。